

【第50号記念特集】

食品ビジネス学科（食品経済学科）の思い出

盛田 清秀*

食品経済学科（当時）に採用され助教授として赴任したのは1999年4月でした。それから2012年3月までの13年間、日本大学に勤めることとなります。それ以前の19年間は農林水産省の研究所・試験場に勤務し、茨城県、広島県、北海道をフィールドに農村・農家調査をメインとする仕事でした。

赴任当時の学科教員は、高橋正郎、樋口貞三、清水隆房（研究所）、高坂鉄雄、上路利雄の5教授、伊豫軍記、上野恒雄、安村碩之、小野田昌彦、稗貫峻、下渡敏治、大矢祐治、木島実の8助教授、齋藤武至、清水みゆきの2専任講師、盛田を含めると計16名という陣容だったと記憶しています（敬称略、順不同）。2002年の新学期に藤沢の湘南キャンパスに移ったのですが、それまでは三軒茶屋の古い校舎が学科のメインキャンパスでした。三軒茶屋は現在危機管理学部のキャンパスになったと聞いていますが、通うのに便利な立地で近隣に各種商店も多く、学生だけでなく教職員の日常に潤いを与えてくれる環境だったと思います。

ここではキャンパスのことより、学科教員の思い出を紹介することも含めて、私の在職時代の印象について記したいと思います。赴任当時の先輩、同僚の先生方で今も在職中なのは、清水みゆき先生だけとなり、20年余りという時間の重みを感じざるをえません。すでに鬼籍に入られた先生も4人（上路先生、清水隆房先生、上野先生、小野田先生）いらっしゃいます。みなさん思い出に残る方々なのですが、とくに上野先生は、学年担任をご一緒させていただいた縁があり、思い出深いものがあります。お酒が好きな先生で、人情味があり、新任の私にも優しくしてくださり、それで学科になじむのが難しくなかったように思います。

上野先生からは、出身大学のことは別にして、日本大学を母校と思ってほしいと言われ、正直面食らいましたが、今では日本大学が私の第2の母校といってよいでしょう。大学というところは、それぞれ出自を異にする個性の寄り合いであり、お互いが育ってきた、あるいは所属してきた組織の文化を持っています。その中で、身につけた文化にこだわるの

*食品ビジネス学科 元教授（もりた きよひで）

ではなく、現在所属する組織、集団をどのようによくするかを普段から意識しながらそこでの自分の役割を果たしていくものです。その中で自ずと帰属意識、集団心性というものが形成されていくことになります。そのような意味で、日本大学が「第2の母校」にと、自然と自分の内部で醸成されていったわけです。上野先生とご一緒できたことは本当にありがたいことでした。生前にはきちんとお礼の言葉を述べる機会はありませんでしたので、この機会に記させていただきました。

もちろん、送別の辞をここで披瀝するつもりはないのですが、他の先生方にも多くのご恩をいただいたと思っています。また、言うまでもないのですが、毎年のゼミ生をはじめとした学生の皆さんとの出会いも、今思えばさらにかけがえのないできごとだったと思返すのです。

そのことで思いますことは、やはり大学は独特の組織、機構だということです。たぶん、共同社会と表現してもよいのではないのでしょうか。大学はもともとヨーロッパの中世に教師と学生が共同生活をして自立的な教育を行っていたという起源があります。大学では、教え合い、学び合うという教員間、教員と学生間（さらに学生間においても）の相互作用が伴います。決して一方的な教育の場ではありません。そのことが大学をして特別の存在、共同体・共同社会としての特質を形成するのだと思います。

私は人生の前半期において、研究所にいたからそのことが明瞭に認識できます。研究所時代は、研究テーマの解明に専心従事し、先輩研究者、同僚と切磋琢磨し、侃々諤々の議論（時に本当に激しい議論）を交わしていく中で仕事をしていました。たぶん、組織への帰属意識はかなり強いものがあったと思いますが、その性格は大学と少し違うようです。共同体的性格の有無というレベルで、たぶん違うということでしょう。

私は2012年に東北大学に移りまして、2018年にはそこを定年退職し、現在は2018年に新設された石川県にある公立小松大学（の国際文化交流学部というところ）に勤務中です。2022年3月にはそこも退職予定で、いよいよ研究・教育生活から離れることになります。大学生活の最初を送った日本大学での13年間は、本当に思い出深いものでした。食品ビジネス学科の発展に期待し、教職員、学生が織りなす未来にエールを送りたいと思います。